This Page Is Inserted by IFW Operations and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

As rescanning documents will not correct images, please do not report the images to the Image Problem Mailbox.



End of Result Set

Generate Collection Print

L3: Entry 1 of 1

File: DWPI

Feb 27, 1976

DERWENT-ACC-NO: 1976-27483X

DERWENT-WEEK: 197615

COPYRIGHT 2002 DERWENT INFORMATION LTD

TITLE: Carbon-metal composite lubricant material - with excellent mechanical strength

and abrasion-resistance even at high temp

PATENT-ASSIGNEE: NIPPON CARBON CO LTD (NICN)

PRIORITY-DATA: 1974JP-0097047 (August 26, 1974)

PATENT-FAMILY:

PUB-NO

PUB-DATE

LANGUAGE

PAGES

MAIN-IPC

JP 51<u>024525</u> A

February 27, 1976

000

INT-CL (IPC): B22D 19/08; C22C 9/00

ABSTRACTED-PUB-NO: JP51024525A

BASIC-ABSTRACT:

A carbon-metal composite lubricant material comprises carbon compounded with heat-resistant and corrosion-resistant metal esp. Cu, Ni, or a Cu-Ni alloy, and >=1 of Ti, Zr and Si in an amt. of >=40 (pref. >=50) wt.% of 0.5-25 pref. 5-16 wt.% as a wetting agent for the carbon base material. Opt. Sn, Sb, Zn or Mn may be present in an amt. of 3-45, pref. 5-35 wt.% as a third component.

When 25-50 wt.% of the wetting agent forms a carbide, high temp. strength and abrasion-resistance are most effectively enhanced.

ABSTRACTED-PUB-NO: JP51024525A EQUIVALENT-ABSTRACTS:

DERWENT-CLASS: LO2 M22 P53 CPI-CODES: LO2-J01B; M22-H03F; Japanese Patent Application No. 49-97047 (Application date: August 26, 1974)

Japanese Laid-Open Patent Publication No. 51-24525 (Publication date: February 27, 1976)

Title of the Invention: carbon-metal composite sliding

Material

Applicant: Nippon Carbon Co., Ltd.

[Page 131-(1), lines 4 to 9]

2. Claim

A carbon-metal composite sliding material containing carbon and any one of Cu, Ni, and Cu-Ni alloy in a composite manner, said carbon-metal composite sliding material containing, as a wetting material for a carbon base, 0.5 to 2.5 % of at least one of Ti, Zr, and Si.

[From page 132-(5), line 19 to page 133-(8), line 1]

The composition and other conditions for the alloy which can be used to produce the sliding material of the present invention are as follows.

Wetting material: Ti, Zr, or Si, 0.5 to 25 % by weight, preferably 5 to 16 % by weight;

Base: Cu, Ni, or Cu-Ni, not less than 40 % by weight, preferably not less than 50 % by weight, as metal or alloy

excellent in heat resistance and corrosion resistance;

Third component if necessary: at least one of Sn, Sb, Zn, and Mn, 3 to 45 % by weight, preferably 5 to 35 % by weight;

Further if necessary, at least one of Fe, Cr, Pb, Mg, and P, 1 to 15 % by weight; and

Melting point of alloy: 600 °C to 1200 °C, preferably 700 °C to 1000 °C.

The carbon base is infiltrated with the alloy in accordance with an ordinary method in a pressure vessel for the high pressure. The infiltration temperature is preferably higher than the melting point of the alloy by about 50 to 200 °C. However, especially in the case of the carbon block material, the separation phenomenon frequently occurs as the infiltration temperature becomes high. Therefore, the infiltration pressure is preferably 700 to The carbon base and the alloy are installed at separate positions in the pressure vessel, and then the air in the vessel is substituted with an inert gas such as nitrogen, helium, and argon. Subsequently, the internal temperature of the vessel is raised to the infiltration temperature. The internal pressure of the vessel is further reduced, if necessary. Especially, when the carbon base is a block material, it is necessary to reduce the pressure, wherein it is preferable that the pressure is not more than 1 mmHq. The carbon base is immersed in a molten alloy at the reduced pressure or at the normal pressure,

followed by applying the pressure and maintaining the pressure with the inert gas at not less than 20 kg/cm^2 , preferably at 50 to 200 kg/cm^2 for 1 to 60 minutes, preferably for 3 to 30 minutes. Then, the carbon base is pulled up from the molten alloy and it is taken out from the vessel after being cooled.

When the base metal is selected, it is necessary that the melting point of the alloy is within the range described above, and the lubricating property is satisfactory. The effect of the addition of the third component is as follows.

Decrease in melting point: Sn, Sb, Zn, Mn, Mg, P;
Improvement in high temperature strength: Sn, Fe, Cr;
Improvement in wear resistance: Sn, Mn, Fe, Cr;
Improvement in lubricating property: Sn, Pb; and
Cleanness of metal: Zn, Mg, P.

[From page 133-(8), line 20 to page 133-(9), line 4]

When the block material is used as the carbon base, the porosity of the base before the infiltration is preferably 10 to 60 %, and more preferably 25 to 45 %. The larger the porosity is, the less the separation phenomenon occurs.

[Page 133-(9), lines 15 to 18]

When the sliding material of the present invention is produced, a compound ratio for the carbon base and the

alloy is 10 to 60 % by volume of the alloy, preferably 25 to 45 % by volume of the alloy. The balance is the carbon base.



作'新'篇

昭和49年 8月25日

特許庁長官 荀 醛 英 雄 殿

1. 発明の名称 炭米・金銭複合摺動材

2. 37. 明 名

マッシ 住所 神 奈川 県 辺 子 市 逗 子 5 - 5 - 4 2

が マル トヨノスケ 氏名 金 丸 豊之助 (ほか2名)

3. 特許出願人

住所 東京都中央区八丁堀二丁目6番1号

名称 日本カーポン株式会社.

代表者 垣 孫 秋

4.代 理 人 〒105

住所 東京都港区芝西久保明舟町丁

成ノ門電気ビル 電話(501)9370

Wン口 近気とか 「重脳(301)3010

(6899) 弁理士 伊東辰 雄蕊小梨 (ほかに紹介

49-097047

方式 ①

明 却 杳

1. 発明の名称

氏 名

炭素 - 金属複合摺動材

2. 特許請求の範囲

Ti、 2r または Si の少なくとも1 積を設設期 材のぬれ材として 0.5 ~ 2 5 多含有せしめたことを特徴とする Cu または Ni または Cu - Ni 合金とカーポンとを複合させた炭素 - 金銭複合摺動材。

3.発明の詳細な説明

本発明は400℃以上の高温においても優れた機械的強度及び耐原耗性を有する炭素 - 金属復合摺動材料に関するもので、炭素基材と高融点合金とを結合した炭素 - 金属復合摺動材に係る。

現在、ロータリーエンジン用アペックス・シール、各種コンプレッサー及びポンプ用ペーン、 あるいは回転軸受として炭素の特徴である優れ た自己潤滑性に金属の高機械的強度を付与せし めた炭素 - 金属複合摺動材が爽用に供されてい

(19) 日本国特許庁

公開特許公報

①特開昭 51-24525

43公開日 昭51. (1976) 2.27

②特願昭 4P-P2047

②出願日 昭49 (1974) 8 26

審査請求 未請求

(全夏夏)

庁内整理番号 65·5/4 xx

6441 3P 6222 42

6554 42

11 BOBJ 10 A6,

10 L15

52日本分類

B22D 19/08

C12C 9/00

C11C 19/03

(51) Int. C1².

る。

本発明者等はこれら高温雰囲気でも使用出来る智動材を目的とし、Cu 又はNi を務材として、これらにTi、Zr、Si をぬれ材としてさらにはSn、Sb、Mn、Mg、P、Zn 等を配合した股点600~1400℃の合金を作成し、炭素質改は黒鉛質の炭素基材(以下、単に炭素蒸材という)のプロック又は粉末に溶膜したそれらの合

(2)

金を加圧含砂させた削熱性炭素・金属複合相動材 の発明を完成するに到つた。

- 一本窓側の竹子となるとにろは炭素基材と金属との結合強度を高めるためのぬれ材(以下単位ぬれ材という)としてTi、 Zr 及び Si を使用したことである。 元米炭素、 及び 黒鉛材料は従来より金属の飼込み用ルツ 形に使用される程金属とはぬれ 難い性質があり、 このため金属の耐熱性が良好であるというだけで単に Cu、あるいは Ni 又はそれらの合金を炭素 基材中に含浸せしめても十分な強度を有する複合材料は得られない。その原因は炭素とのぬれが悪いためである。

力、炭素とのぬれ性が良好な AI は 6 0 0 ℃ 以上の高温溶融含設ではカーバイドの発生が著 しく、しかも生成したアルミニウムカーバイド は化学的に活性なため遅分等の影響を受け易く そのために耐蚀性が劣化するという欠点を有す る。Fe 系は溶融温度が高く溶融加圧含設法によ り工業的に炭素 - 金属複合材料を製造すること は非常に難かしく実際上不可能といえる。

(3)

い合金だけで売崩されるために発生するものである。従つて内部は常温及び高温における機械 的強度が低く又金属の充塡率が悪いため合設理 が生じ易い。

そとで本発明者らは上記のどとく分離現象を 生ぜず特性的にも良好なる炭素 - 金属複合材料 を刊るため以下に述べる好適条件を見出したも のである。

本類で使用される合金中のぬれ村として含有される Ti 又は 2r、 Si の量は他の合金組成によっても異立るが大体 0.5~25 重量多好ましくは5~1 6 重量多であつて 0.5 重量多未満では 選貨的な効果が認められず分離現象は少なくなるが 25 重量多を解えると Ti 又は 2r、 Si が逆に偏何して均質性が悪化する。又融点を下げる為に Sn、 Sb、 2n、 Mn 等の第三成分を多く添加せ 4 はならないので、脆くなる。

本願摺動材の製造に使用できる合金の組成その他の条件は、下記のごとくである。

Cn 又社 Ni を基材として、とおらに含有せしめた Ti 、 Zr 、 Si は炭素に対するぬお付きしての効果を有するだけでなく、約700で以上の腐温含数においてはこれらが円素较の障罪面においてカーバイドを形成し高温強度をよう一層向上させると同時に耐摩耗性の向上にもかりする。しかも TiC 、 ZrC 、SiC 社 Al 4Cs と異変り化学的に安定であつて耐動性があればるということが無い。

しかし、ただ単化Ti、Zr、Siを炭素に対する加れ材として含有せしめたCn 又はNi 基合金を炭素プロック又は粉末に潜機加圧含浸を行なっても初られる炭素…金属複合材料は、材料の内部と表層部が異つた組成及び特性をもつたれののになることが多い。(別紙写真等照)この分離現象は含硬時に浸入するとき、合金中のTi、Zr、Si 等の加れ材が炭素と優先的に加れて、その一部はカーバイドとなり内部へ到達前に消費されてしまうので、内部は加れ材を含有しな

取れ別―― Ti、 Zr または Si 0.5 ~ 25 重量
 多、好ましくは 5 ~ 1 6 重量
 ベース― 耐熱性、副働性にすぐれた金属义は合金として Cu 、 Ni または Cu・ Ni 4 0 重量が以上、好ましくは
 5 0 重量が以上

(4)

必要に応じて

第3成分——Sn 、Sb 、Zn 、Mn 必少くともし 種 3 ~ 4 5 東最多、好ましくは 5 ~ 3 5 乗 量 多

更に必要に応じて

Fe . Cr . . Pb .

Mg、Pの少くとも1種 1~15面量を合金の融点 600で~1200で、好ましくは700で~1000でである。炭素基材への合金の含役は高圧用圧力容器中で通常の方法で行なわれる。含砂温度は合金の融点より50~200で位高目の温度が好ましい。しかし特に炭素プロック材の場合には含砂温度が高温になる程分離現象が多くなるので700~900で

が好せしい。圧力容器中に異常書材及び合金を 別々の位置に設置した後、容器内の空気を電光、 へりのみ、アルラン等の不括性ガスで置換し、 ついで内部を食品観度にまで好温させる。容 内は更に必要に応じて減圧にする。特に 材がプロンク性の場合は減圧が必要で、1 mile 以下にすることが好ましい。異な材は減圧或 いは、常圧下で密視合金中に設置し、ついて 活性ガスにより20切/cm² 以上、好ましくは 50~200炒/cm² で、1~60分間、好まし くは3~30分間加圧保持後、溶湯合金中から 引上げ、冷却被容器から取出される。

なか、ペースメクルの選定に当つては、合金の缺点を上記範囲に入れると共に調剤性の良い ことが必要である。また、第3成分の添加効果 は次に示すとかりである。

融点の低下 —— Sn、Sb、Zn、Mn、Mg、P 高温強度の向上 —— Sn、Fe、Cr 耐摩耗性の向上 —— Sn、Mn、Fo、Cr 制帯性の向上 —— Sn、Pb

基材としてプロック材を用いる場合は含役前花材の気孔率は10~60多、好ましくは25~45多が良く、気孔率の大きいもの程分離現象は少ない。

これら炭素基材のプロック村又は粉末中に予めてi、Zr、Siの粉末を混入分散させたものを 別いると分離現象が発生せず、かつぬれ材を少ししか含有していない Cu 、 Ni 基合金を用いても十分に効果がある。炭素プロック又は粉末中に予め混入させるぬれ材の散は炭素に対して5~30重量が変ましい。5重量が変越えると播動特性を悪化させる。添加粉の粒度は74ヵ以下が好きしい。

また、本願招動材の製造において炭累基材と 前記合金の配合比は合金10~60容量多で、 好ましくは25~45容量多であり、残部は炭 器裏材である。合金の配合比が10容散多未満 では十分な強度が得られず、60容散多より大 もくなると耐寒転性が減少し、摩擦係数が増大 メタルの存化 ---- Zn、Mg、P

商記条件での含役時代、ぬれ剤と炭素基材が結合し、そのぬれ剤中の10~60重量多がカーバイドを形成する。カーバイドの形成量は炭素基材、合金の組成及び含役条件により適宜調整することが出来るが、特に好ましいカーバイド形成量はぬれ剤中の25~50重量多である。前間ぬれ剤がカーバイドを形成した場合の効果は、製品の高温強度の向上、耐摩耗性の向上である。

展案基材の炭素原料としては石炭、ビンチコークス、人造思鉛、カーボンプランク、熱分解 思鉛、ガラス状カーボン等が用いられるが、石 炭、ビッチコークスは耐摩耗性にすぐれている。 プロンク材は通常原料粉に必要に応じて炭素化 結合剤を混合し成型した後、これを1000で 以上、好ましくは1200~1400でに加熱 焼成して得られる炭素原料の粒原分布は15~ 105μ(好ましくは74μ以下)のものが良 く、最小粒径が大きい程分離現象は少い。炭素 (8)

するなど摺動特性が低下する。

以下、実施例により本発明をさらに詳述する。 なお、特記しない限り、部および百分半は重量 構築である。

实施例1

石炭ピッチュークスを粒径74ヵ以下に初砕し、粘結材として石炭ピッチをコークス的 100 部に対し30 部加充、約150 での温度で1 hr 混視した後冷却し粒径105 μ以下に再色砕砂、圧力1 1/cm² で100×100×30 麻小成形体を作り、焼成炉中で10℃/hr の昇温速度で最高温度1300℃焼成して炭光材料を得た。

次にTi 4 多、Mn 2 多、Sb 2 0 多、気 Co 及び若干の随伴不純物よりなる合金(緑点 7 0 0 で)を調製し、面配炭素素材と共化オートクレープ中に装填し、最初 0.1 mallg の真空で炭素基材気孔中に存在する空気を排出した後、面配合金を8 0 0 でで加熱溶融させた中に面配炭素素材を浸漬し、1 0 0 ㎏/cm² の高圧 Ar ガスで面配合金裕粉を加圧含及させ、炭素・金組複合材料

を得た。その強度、硬度、耐摩耗性等の确定結果を突1に記載する。カーバイド生成量は Ti 分の278であった。

爽 施 例 2

実施例1 化記載した方法で製造した炭素基材に Ti 1 %、 P 8 %、 Sn 5 %、 及 Cu よりたる合金 (融点 7 2 0 ℃) を同じ方法で溶協温度 950 ℃で加圧、含受させ炭素 - 金銭復合材を得た。 この製品の特性の測定結果は、表1 に記載する。 なか、カーバイド生成量は Ti 分の3 5 % であつた。

灾施例3

実施例1に記載した方法で製造した炭素基材とTi 16%、Sn 20%、残Cu よりなる合金(融点 950で)とを溶湯温度 1000でで加圧含浸させ炭素 - 金属複合材料を得た。該複合材料の特性測定結果を要1に記載する。カーバイド生成景はTi 分の50%であつた。

突施例4

掷発分425、水分15、灰分55、残部固 (11)

族材にシリコンを15%、すず10%、残りが 銅よりなる合金(融点800℃)を同じ方法で 容偽温度1000℃で加圧含及させ、炭累一金 路複合材を得た。この製品の特性測定結果は要 1に記載する。

災 航 例 7

奥施例8

実施例1、2に記載した方法で製造した炭素 基材に、Ti 1 0 多、Sn 2 0 多、Ni 3 0 多、 Cu 4 0 多よりなる合金(股点 9 0 0 で)を溶湯 温度 1 0 0 0 でで加圧含及させ炭素 - 金属複合 定炭累分からなる無音炭を最大粒74ヵ以下に
敬初かし、圧力3 t/cm² で100×100×30
mmに成形した後、焼成炉中で N₂ ガスを保入しつ
つ5 で/hr の外温速度で最高1350 でに焼成
して炭累基材を製造した。次に、この炭素 材
に実施例1と同様なる方法で 2r 9 多、 Sn 8 多、
Mn 5 多、残部 Ni よりなる合金 (融点1200
で)を務偽温度1300 でで加圧合設させ炭流
・金属複合材料を初た。その特性を表1 に記載
する。

灾旃例 5

1200℃で焙焼した粒径74ヶ以下のコークス粉末を100×100×500mの鉄製低中に充填し、実施例1と同様にTi7%、Zn15%、Sb13%、残 Cuよりなる合金(融点 850 で)を溶弱温度1000℃で加圧含役し炭素ー金属複合材料を得た。以上の各実施例で得た製品の特性を表1に示す。

寒施例 6

実施例1、2 に記載した方法で製造した炭素(12)

・材を得た。その特性を表1に記載する。

夹施例 9

1300℃で焙焼した粒径44μ以下の無煙 炭粉末に44μ以下のTi粉末を5 取散が混合し ボールミールにて均一に分散させる。この混合 粉末を鉄製作中に充填し、Ti5%、Sn 15%、 残 Cu よりなる合金(融点 950℃)を形為温度 1000℃で加圧含及し炭素・金属複合材料を 得た。その特性を表」に示す。

<u> 突施例10</u>

突施例11

石炭ピッチョークスを粒径74μ以下に粉砕した粉末に10重量多の粒径74μ以下のTi 粉末を加えボールミールで均一に混合する。こ の混合粉末に粘結材として石炭ピッチをコーク

(13)

次に、本願複合材料の特性をさらに明確にするため、比較例かよび従来例を示す。

比較例1

実施例2 において、Ti を使用しなかつた以外は、P 8 %、Sn 5 %、残 Cu の合金(融点 720 で)を使用して同様に行なった。

比較例2

実施例3と同様であるが、ただしSn 20 %、Ti 27 %、残Cu の合金(融点900℃)を使(15)

ブルの高さ方向の差を測定した。

表 ¹ .							
-	含杉前炭 素基材]					
尖施例	カサ比重	金属/炭 素基材の 容量比	カサ比重	ショア 硬 度		於 底 (%2 € 2)	的特色社 (〃)
1	1.6 5	20/80	3.6	101	2100	1400	6
2	1.7 5	15/85	3.3	103	2250	1500	5
3	1.5 5	25/75	3.6	102	2700	2100	3
-1	1.10	30/70	3.5	105	2950	2300	2
5		40/60	3.4	100	2300	1600	4
6	1.4.5	30/70	3.5	100	2200	1500	4
7	' i	35/65	4.0	102	2800	2200	2
8	1.5.5	25/75	3.6	103	2400	1900	5
9	-	37/63	4.2	100	3000	2400	3
10		37/63	4.3	98	2200	1800	4
11 1	1.68	30/70	3.8	100	2500	2100	4
従来例:	1.5 5	25/75	2.1	95	1900	1000	12
従来例2	1.45	30/70	3.8	100	1200	500	9
比較例1	1.5.5	25/75	3.6	103	1350	750	8
比較例2	1.65	20/80	3.2	110	1200	1000	6

用し1350でで含使して複合材料を得たが、 明らかに外観ムラが認められた。

従来例1

従来例2

実施例1 に記載した方法で炭素基材に Pb 1 0 5、残 Cu の合金(融点 9 5 0 ℃)を溶過温度 1 0 5 0 ℃で含浸した。

以上待られた複合材料の特性を表 1 に示す。
これら試料の特性測定のうち、高温強度は島
稚製作所製オートグラフ IS - 5 0 0 0 型に高温
強度測定用附属装置を装備したもので 4 5.0 で
(N2 ガス雰囲気)で測定し、摺動特性は定速式
摩耗試験機を用い周速 7 6 ㎞/ hr、押付圧 1.5 ㎏/ cm²、サンプルサイズ 1 0 × 2 0 × 5 ㎜で、
PC - 2 5 製の回転板に接触摺動させ、調滑油としてモーターオイル 1 0 W - 3 0 Wを 1 cc/hr の割合で適下し 8 時間連続運転を行ない、サン
(16)

4.図面の簡単な説明

第1 図は本発明の炭素一金属複合指動材の一例の断面を、第2 図は前記指動材の外部表面を示す線図であり:また第3 図かよび第4 図は、それぞれ、前記第1 図かよび第2 図に示す指動材の実物のカラー写真である。

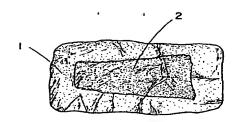
1 ……ぬれ材を含む金属で含むされた褶動材 部分

2 …… ぬれ材を含まない金属で含むされた樹 動材部分

> 特許出願人 日本カーボン株式会社 代理人 弁理士 伊東 辰 雄 代理人 弁理士 山下 様 平

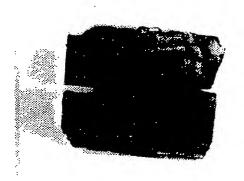
(17)

第 1 図

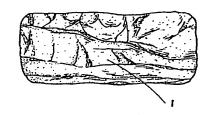


沙3 图

学4 国



2 X



وً.

5.路付書類の日鉄

(1) 10. 粣 1 通

(2)類書副本

(利つて衝充する)、流 Æ 状

6.前記以外の発明者および代理人

定 明

セ タガヤククマガワデンエンチョウフ 東京都世田谷区玉川 田園 調布 1 - 5 - 10 住海

佐 16.8

13/17 / (ナミク A カワ 神奈川県横浜 市南 区 六 ツ 川3 - 124 - 5 11: 197

カリ ||| 11i S 91

人 照 人 **7105**

住所 東京都港区芝西久保明舟町15番地

成ノ門電気ビル 電話(501)9370

氏名 (6538) 并理士

続 舶 正 告(方式)

明 和 50年 4月 1月

特許庁長官

事件の設示

昭和49 年特 許 顧 3 97042 3

误紧一金属複合招動材

都正をする者

特許出頭人

東京都中央区八丁州2丁目6番ノラー

日本カーボン株式会社代表者 垣 旅 秋 三

〒105

東京都港区芝西久保明舟町ノケ

(6899) 弁理士 伊 東 辰 雄

施正命令の日付 昭和50年/月//日昭50.3.25 発送

箱正により増加する発明の数 な し

稲正の対象「明細書の発明の詳細な阻、図面の簡単な説

明の假」および「図面」 補正の内容

別紙のとおり



- ① 明副書中、第4頁第/5行の *(知紙写真参照)*を削除する。
- ② 同志、第18頁第4行の "ボナ製図であり"を、 「ボナ製図である。」 に訂正する。
- (3) 同志、同百萬4行の
 ";また第3回かよび第4卤は、それぞれ
 可記事/肉かよび事2國に示す相動材の主物
 のカラー写真である。"
 を削除すると共に続付のカラー写真、第3
 図書4回をも削除する。